

ESSAY

ファッションはなぜくるくると変化し続けるのか？

それは、人を退屈から救うためである。生きるか死ぬかというぎりぎりの状況を生き延びてしまえば、人は、退屈を耐えがたく感じ始める。「人を善悪で区別するなど愚かなことだ。人間は魅力的か、退屈かのどちらかである」とは19世紀イギリスの作家、オスカー・ワイルドのことばだが、退屈を感じない、そして感じさせないために、人は愚行すれすれのファッションに走ることがある。

たとえば、真珠のように白く輝く、隙なくきれいに並んだ歯列。ザ・ハリウッドスターであるトム・クルーズが誇示するような、理想的な歯である。美しいかもしれないが、すぐに退屈に見えてくる。

だから今、ファッションニスタの間でなにが素敵ということになっているかといえば、「ギャップ・ティース」である。歯と歯の隙間（ギャップ）が大きめに開いた歯列のこと。1970年代にも、ローレン・ハットンの人気が一時期ギャップ・ティースを流行させたことがあるが、2009年あたりから、再び人気に火がついている。先導するのは、ララ・ストーンや、ジョージア・ジャガーをはじめとする若手モデルたち。ジョージアは、かのミック・ジャガーの娘で、パパゆずりのぼってりした唇にギャップ・ティースという口元が、胸騒ぎをかきたてるような個性的な魅力になっている。

小さいころから歯を矯正することが強迫観念のようにとりついている文化のなかで、隙間のある歯が魅力的に見えるのはなぜなのか。もちろん、完璧な理想美に飽き飽きした目にとって、子どもっぽい不完全な「弱点」が新鮮に見えるということが最大の理由である。それに加えて、今は、スキップ歯が「ホンモノ」を感じさせるということがある。フォトショップなどで簡単に理想美をねつ造することができる時代である。だからこそ、修正されていないホンモノ感、「素」で「ありのまま」の印象が、好感として人の心に届くのかかもしれない。

「素」で「ありのまま」の歯がいい、という感覚が、日本ではさらにややこしい流行を生んでいる。つけ八重歯である。西洋では、吸血鬼を思わせるとかあまり評判のよくない八重歯（英語では、牙を意味するファングとも呼ばれる）だが、日本では子どもっぽい

「もっと白い歯」のその先には



のがかわいいとかで八重歯ブームが加速し、わざわざ人工八重歯をつけてそれを強調するというトレンドが生まれている始末。誇張された「素」である。タレントの「すっぴん」さらしにも同じ空気を感じる。あの「すっぴん」は、演出された「すっぴん」である。

この「素」のブームにも飽きたら、歯のファッションはどこへ行くのだろうか。「グリル」が広く普及するかもしれない。グリルとは、歯につけるアクセサリーのことです。1980年代からヒップホップ系のおしゃれな人たちの間ですでに定着した感があるが、それ以外の層にも広まるかもしれない。また、爪にほどこすジェルネイルのように、歯にほどこすジェルティースのようなものが流行し始めてもまったく驚かない。これもまた単色塗りから始まり、グラデーション、ラインストーン、スカルプチャー、アートなど、多様なバリエーションが広がっていくだろう。

歯を人工的に着色するなどありえないって？ いや現に、歯を黒く染めた歴史ならば存在する。日本の「おはぐる」ばかりではない。16世紀のイギリスにおいても、歯を黒く染めることが流行したことがある。日本の場合、既婚夫人の目印としての「おはぐる」であったが、イギリスの場合、黒い歯は富の象徴だった。砂糖を摂取することができた富裕階級の人々の歯が黒ずんでいたのだが、逆に、歯が黒いことが富裕階級の証となって、人工的に歯を染めるトレンドが生まれたということらしい。

とにかく、人間は本当の意味での「ありのまま」だけには耐えられないのである。現に今だって「白以上の白にする」ためのありとあらゆる人工的な工夫が日々加速している。これが行きすぎて、「白を超える白」という色が、気がつけばぜんぜん別の色になっていったって、まったく不思議ではないのである。

中野香織（なかの・かおり）

エッセイスト・服飾史家。明治大学特任教授（国際日本学部）。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学（総合文化研究科）。服飾史の知見に基づく独自の視点から、ファッション論を全国紙や情報誌などで展開し、好評を博している。主な著書に、『モードとエロスと資本』（集英社新書）、『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』（新潮社）、『スーツの神話』（文春新書）、ほか多数。